

ザンビアについて



塩田 久朗 (しおた ひさお)

前・ザンビア日本国大使館 経済開発協力班
国土交通省北海道開発局札幌開発建設部札幌道路事務所道路
路施工保全官

1997年北海道開発局入局。主に道路部門で勤務。2023年1月から在ザン
ビア日本国大使館に勤務し、経済協力などを担当。2025年4月より現職。

はじめに

私は、2023年1月から2025年3月までの2年3か月間、ザンビアの首都ルサカにある在ザンビア日本国大使館に勤務していました。担当は経済開発協力班で、インフラ、鉱業、電力分野などを担当していました。日本からザンビアへの直行便はなく、成田空港から乗り継ぎを含めると、所要時間はおよそ24時間に及びます。本稿では、私が当地で担当していた業務や生活について紹介します。



ザンビア（首都ルサカ）の位置図

ザンビアの概要

ザンビアの国土面積は752,612km²（日本の約2.2倍）で、コンゴ民主共和国、タンザニア、マラウイ、モザンビーク、ジンバブエ、ボツワナ、ナミビア、アンゴラの8か国と国境を接する内陸国です。国土の大部分は標高800m以上の高原地帯に位置しています。

人口が集中している地域は、首都ルサカ周辺、南部州リビングストーン市周辺、鉱山地帯であるコッパーベルト地域です。気候は亜熱帯に属し、首都ルサカ（標高約1,300m）では、以下の3つの季節に分けられます。

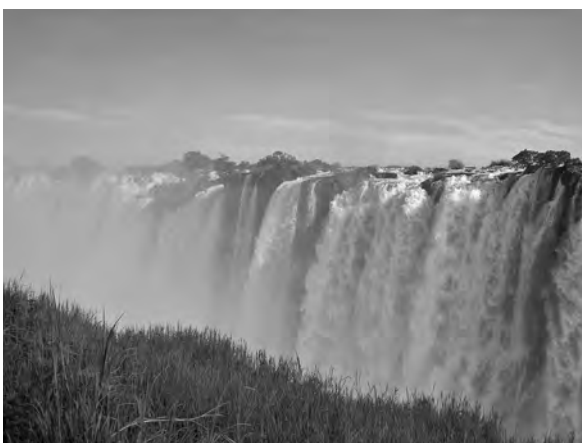
- ① 涼しい乾季（5月～8月）：平均気温は18度前後。7月が最も寒く、朝の最低気温が10度を下回ることもあり、暖房が必要な日もあります。

- ② 暑い乾季（9月～11月）：平均気温は23度前後で、35度を超える日も多く、直射日光は強いものの乾燥しており、朝晩は涼しく、日本の夏より過ごしやすくと感じられます。
- ③ 雨季（12月～4月）：平均気温は21度前後。日本の梅雨とは異なり、短時間の激しいスコールの後に晴天となることが多く、比較的涼しく感じられます。

人口は2021年時点で1,892万657人（世界銀行）とされ、増加傾向にあります。2000年は約1,058万人、2010年は約1,391万人、2015年は約1,621万人でした。平均寿命は、1996年には42歳まで低下しましたが、その後改善し、2014年には60歳、2017年には62歳、2020年には64歳となっています。

民族は公式には73民族が認定されており、主要民族としてはベンバ、トンガ、チェワ、ロジ、ンセンゲなどが挙げられます。これに加え、欧州系（白人）やインド系の住民も居住しています。言語は公用語である英語のほか、各民族がそれぞれの言語を使用しています。

国民性は一般に温厚で辛抱強いとされ、独立後は南部アフリカ地域における植民地解放闘争を主導・支援してきた歴史があります。また、内戦やクーデターの経験がないことから、政情が不安定な周辺国に対して相対的な安定性への誇りを持つ傾向も見られます。



ビクトリアの滝

主要産業は銅鉱業で、総輸出額の約7割を占めています。そのほかの輸出品としては、メイズ（トウモロコシ）、綿花、花卉、タバコ、宝石などがあります。銅（地金）の生産量は世界第11位、コバルトは第9位（JOGMEC、2018年）であり、鉱物資源供給国としてのポテンシャルは非常に高く、世界各国の鉱山企業が投資を行っています。

ザンビアの電力供給は9割以上が水力発電によるもので、総発電容量は約2,700メガワット（MW）です。観光資源としては、世界三大瀑布の一つであるビクトリアの滝（ザンビア唯一の世界遺産）をはじめ、20の国立公園と36のサファリ管理地域があります。これらの地域は国土の約30%を占めています。2014年の外国人観光客数は約95万人で、その約半数がアフリカ諸国からの訪問者であり、次いで米国、英国、中国からの観光客が多くなっています。



シマウマ

ザンビアと日本の関係

日本との関係では、2009年7月に石油天然ガス・金属鉱物資源機構（JOGMEC）が、鉱山・鉱物開発省及び商業・貿易・産業省との間で包括的覚書を締結しました。2018年5月には、日アフリカ経済フォーラムの機会に協力文書が署名され、2023年8月には、探査分野などの協力強化に係るMOUが、西村経済産業大臣とカブスウェ鉱山・鉱物開発大臣の立ち会いのもとで署名されました。

北海道とザンビアの関係

北海道とザンビアの関係も深く、北海道大学とザンビア大学は、1985年にザンビア大学獣医学部（UNZA-Vet）が開校されて以来、共同研究や人材育成などの交流を長年にわたり続けてきました。

在外公館の仕事

在外公館の仕事は、外交活動の最前線で行われ、日本と相手国との政府間交渉、日本の利益を守るための情報収集、日本人の保護、文化交流、経済協力など、多岐にわたります。主な業務内容としては、相手国政府との関係構築、広報・文化交流の推進、現地における日本人の安全確保や支援、開発協力の実施・支援などが挙げられます。

日本の経済協力

私は経済開発協力班に所属し、主に経済協力を担当していました。ザンビアに対する日本の経済協力は、1970年のJOCV（青年海外協力隊）派遣に始まり、1972年の円借款、1980年の無償資金協力へと展開してきました。対象分野は、運輸交通、水、電力といったインフラ分野のほか、民間セクター開発、農業、保健、教育など多岐にわたります。

円借款については、ザンビアが拡大HIPCイニシアティブの完了時点に達したことを受け、2008年に17年ぶりに再開されました（電力アクセス向上計画）。近年では、総人口の約7割を占める農業従事者や中小企業を中心とした製造業の底上げ（民間セクター開発）、成長を支えるインフラ整備・強化、教育・保健・地方給水といった社会基盤整備や人材育成のための環境整備支援が行われています。

滞在期間中の要人訪問について

私が勤務していた期間中、2023年8月には西村経済産業大臣のザンビア訪問がありました。西村大臣はヒチレマ大統領を表敬訪問し、カブスウェ鉱山・鉱物開

発大臣との間で「鉱物分野における協力に関する共同声明」に署名しました。また、JOGMECと鉱山・鉱物開発省との間で締結された、探査分野などの協力強化に係る覚書の署名にも立ち会いました。

さらに、日ザンビア鉱業投資ラウンドテーブルが開催され、日本企業11社の幹部が同席する中、ザンビアへの投資実現に向けた率直な意見交換が行われました。

ザンビアでの生活について

アフリカと聞くと、砂漠が広がり一年中暑いというイメージを持つ方も多かもしれませんが、ザンビアには雪こそ降らないものの、涼しい時期もあります。

食文化については、ザンビアの主食は「シマ」と呼ばれ、メイズ（トウモロコシの粉）をお湯で練ったものを、肉やおかずと一緒に食べます。電力事情としては、赴任1年目に雨季の降雨量が少なかった影響で、水力発電に依存するザンビアではカリバダムの水量が不足し、2年目には最大で1日20時間に及ぶ計画停電が実施されました。照明も使用できず、ろうそくを使って生活していた時期もありました。

2024年11月には日本食レストランがオープンし、牛丼、唐揚げ、とんかつなどの日本食を味わえるようになりました。それ以前は日本食レストランがなく寂しさを感じていましたが、中国人やインド人が多く居住しているため、中華料理やインド料理は比較的容易に



ザンビアの主食「シマ」

食べることができました。ファストフード店も多く、ハンバーガーやピザのほか、ケンタッキーフライドチキンもザンビアで楽しむことができます。現地で人気のファストフードチェーンには「ハングリーライオン」や「ナンドス」があり、いずれも非常に美味しかったです。

日本酒は現地では入手が難しい一方、南アフリカ産のワインは安価で品質も良く、よく飲んでいました。

休日には、世界三大瀑布の一つであるビクトリアの滝を訪れ、「デビルズ・プール」と呼ばれる滝の上の天然プールで写真を撮るなど、スリリングな体験もしました。また、ボツワナのチョベ国立公園では、野生のゾウ、ワニ、カバ、キリン、ライオンなどを間近で見ることができました。そのほか、南アフリカのケープタウンを訪れるなど、普段ではなかなか行くことのできない場所への旅行も経験しました。



ビクトリアの滝（虹）



喜望峰

おわりに

私が赴任していた2年余りは、コロナ禍が明け、日本からの出張者が増加していた時期でもありました。西村経済産業大臣をはじめ、ODA調査団（舞立議員、青山議員）、AU議連の訪問、ヒチレマ大統領の訪日、カブスウェ鉱山大臣の訪日など、要人関連の対応が数多くありました。

また、「草の根・人間の安全保障無償資金協力」事業も担当し、予算規模は小さいものの、地方における学校や病院建設の支援に携わり、地方出張も多く経験しました。首都ルサカとは異なる地方の生活の様子を知ることができ、非常に貴重な経験となりました。

海外生活では、日本とは大きく異なる環境の中で、食文化の違い、タクシーを呼んでもなかなか来ないこと、ATMでの現地通貨の引き出し方など、日本では想像しにくい苦勞も多くありましたが、それらを含めて非常に有意義な経験となりました。

この2年3か月の間、仕事面・生活面の両方で支えてくださった関係者の皆様、上司、JICAの方々にご心より感謝申し上げます。



草の根集合写真